

(題名) のだ小児科医院における禁煙支援外来

のだ小児科医院 野田 隆

胎児から乳幼児のいる家庭には60~80%の割合で喫煙者がいて、その喫煙者の9割は父親でした(1)。

赤ちゃんの尿中コチニンからニコチン暴露の程度をみると、ドアをきっちり閉めて屋外で喫煙しても非喫煙者の家庭に育った赤ちゃんに比べて2倍近く受動喫煙していることが、示唆されています(2)。一方、幼児期に受動喫煙すると、将来喫煙者になる可能性が高いと示唆する報告もあり(3)、9歳までの親の喫煙が18歳の時点での喫煙率を高くするという報告があります(4)。親の禁煙は、家庭内からタバコをなくすことにつながり、最初の1本は家庭内のタバコのことが多いため、防煙にも貢献することになります。若い両親は有病率が低いため、子どもを連れて小児科医を訪れる以外は医療機関を訪れる機会は少ない。この階層の喫煙者の禁煙を支援することは、喫煙者自身の健康に寄与するだけでなく、同居者に受動喫煙させないことで同居者の健康にも良い影響を与え、併せて将来の喫煙者を作らないことに、つながります。

また小児科医は、乳児健診・母親学級など禁煙意欲の高まる時期に喫煙者と接触できる医療機関でもあります。当院外来を訪れる親への禁煙支援を試みてきました。

Reference (1) ; 胎児から乳幼児までの受動喫煙に関する実態報告書

http://www.wakodo.co.jp/baby&family/alive_report/report03/report03.html

2) Johansson, A. et, al. Pediatrics2004;113:e291-e295

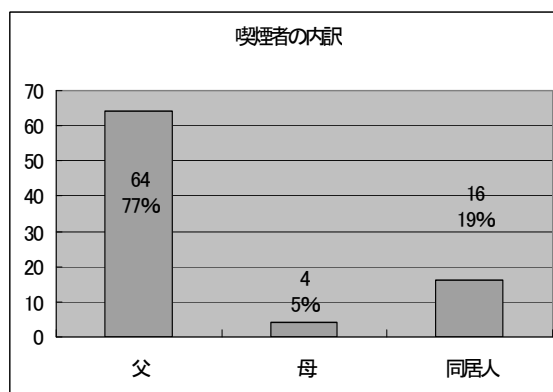
(3) Becklake, M. R. et, al. CMAJ2005;173:377-379

(4) Bricker JB, et al, Addiction. 2003;

98(5):585-93

当院の乳児健診での家庭内喫煙者

乳児健診で家庭内に喫煙者がいると答えたのは、59% (88/142) でした。



8割が父親、0.5割が母、2割が同居祖父母といった内訳でした。田舎であり祖父母と同居する率が高いと思われる。

当院禁煙支援外来の成績 (保険適用前後での比較)

	患者数	平均年齢	頻度	再診率	処方パッチ枚数	継続率
自由診療	70 (15)	41.6 ±13	1.1 人/M	0.9 回	18.1 枚	38.6%
保険診療	30 (5)	46.6 ±12	5.0 人/M	2.9 回	46.4 枚	37.5%

自由診療は平成13年3月の開業から平成18年12月1日まで、保険診療は平成18年6月1日から12月1日までのデータを集計しました。継続率は、初診後3ヶ月の時点でそれに先立って4週以上の禁煙を継続しているものを求めた。

多くの医療機関が、保険診療を行い、家庭での喫煙者の禁煙支援を積極的に行うべきであると考えます。